

研究結果説明書

1. 事業の実施期間

令和4年4月1日 ～ 令和5年3月31日

2. COREネットワークの構成

(1) COREネットワークの名称：くまもと夢への架け橋ネットワーク構想

(2) COREネットワークを構成する高等学校等

①熊本県立第一高等学校（配信校） ②熊本県立小国高等学校（受信校）

③熊本県立牛深高等学校（配信校・受信校） ④熊本県立球磨中央高等学校
(配信校・受信校)

⑤熊本県立教育センター（配信校）

3. 調査研究結果の概要

(1) 「教科・科目充実型」の遠隔授業などICTも活用した連携・協働の取組

(受信教室における体制の在り方に関する取組を含む。)

次年度以降の遠隔授業を円滑に進めることを目指し、教員としての経験年数や経験勤務校に因らずに、遠隔授業の体制を整えることが可能であることを実証し、教育委員会及び構成校を繋げたクラウドによるデータ共有、及び複数回にわたる連絡協議会等によるネットワーク構成校との密な連絡や協議を実施し、遠隔授業を行う運営体制を整えた。

また、本県では配信校と受信校の生徒を同時対象とした授業や教育センターから配信のみを行う授業等、複数のパターンで授業を実施しているため、授業担当者を対象とした協議会を開催し、授業づくりや生徒の見取り・評価について情報共有を図った。

さらに、受信側の学校における立ち会う者の役割を教科指導や担任の指導に紐づけ、役割に意義を持たせる工夫を重ねた。

結果として、遠隔授業を受けた生徒の評価は高かった。自校の生徒だけではなく、他校の生徒との交流も生まれ、学校間を超えた新しい授業の形が創出できた。

(2) 学校間連携を行うための運営体制に関する取組

学校間連携を行うための運営体制として、くまもと夢への架け橋ネットワーク連絡協議会、各校コンソーシアムや運営指導委員会を設置するとともに、遠隔授業コーディネーター(CIO)を任用し、昨年に引き続き、第一高校に配置した。連絡協議会では、教育課程等の共通化、遠隔授業の実施と評価、探究的な学びについて協議を行い、各構成校の情報を共有した。

遠隔授業、探究的な学び共に、くまもと夢への架け橋ネットワークに係る担当者のClassroom及び各構成校の生徒同士を繋げるClassroomを作成し、年間を通じて、取組

状況を共有した。

これらの活動は、運営指導委員会において、遠隔授業や地域との協働のあり方等の事業内容について、委員から指導・助言を受け、事業を推進した。

(3) 市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

ネットワーク構成校では、コミュニティ・スクール（学校運営協議会）により、学校と地域住民等が、学校の教育目標や課題について共有し、子どもの教育に関わっていく場がある。各構成校のコンソーシアムは、すでに導入しているコミュニティ・スクールを活用し、体制を整え、構成校との連携の上、事業推進を図った。

コンソーシアムを通じた教育課程内の取組として、各構成校で設定された「総合的な探究の時間」を活用し、コンソーシアムを活用した取組が実施された。生徒の主体的な活動に基づき、特産品を活用した商品開発や市街地整備課との協働プロジェクト、地域の観光等に関する考察等を実施し、地域課題解決に向けて調査、研究を進めた。その結果、地域から学校への関心も高まり、「地域とともにある学校づくり」に寄与された。

また、コンソーシアムを通じた教育課程外の取組として、県教育委員会により、地域課題解決に向けた探究的な学びを展開するプロジェクトである「くまモンプロジェクト」を実施した。クラウド上で随時、生徒の調査、研究過程を共有し、年間2回の中間発表会、成果発表会で研究内容を共有した。なお、事業全体の成果発表会においても、生徒による発表を実施し、他地域との比較や解決事例をもとにした研究に繋げた。

4. 調査研究の実績

(1) 実施日程

月	実施内容
令和4年 4月	第1回くまもと夢への架け橋ネットワーク連絡協議会 日課・教科書・教育課程等の調整 遠隔授業開始時の状況把握 遠隔授業コーディネーター（CIO）任用手続き
5月	各高等学校コンソーシアム会議（学校運営協議会） ※第一高校、小国高校、牛深高校、球磨中央高校 令和5年度教育課程の提出
6月	「くまモンプロジェクト」連絡協議会 「くまモンプロジェクト」事前研究会 くまもと夢への架け橋ネットワーク Classroom 作成 運営指導委員委嘱手続き
7月	第2回くまもと夢への架け橋ネットワーク連絡協議会

	第1回実証地域連絡会議 令和5年度使用教科書の採択
8月	くまもと夢への架け橋ネットワーク授業担当者会
9月	遠隔会議システム調整
10月	第1回運営指導委員会 <u>「くまモンプロジェクト」生徒中間発表会</u>
11月	第3回くまもと夢への架け橋ネットワーク連絡協議会 第2回実証地域連絡会議 内田洋行・運営指導委員による訪問調査
12月	<u>くまもと夢への架け橋ネットワーク成果発表会</u> 内田洋行ヒアリング
1月	次年度開講授業準備
2月	第1回運営指導委員会 <u>「くまモンプロジェクト」生徒中間発表会</u> 各高等学校コンソーシアム会議（学校運営協議会） ※第一高校、小国高校、牛深高校、球磨中央高校 事業成果報告会 遠隔授業コーディネーター（CIO）再任用手続き
3月	次年度に向けた各構成校との打合せ 報告書刊行

※学校における調査研究の実績のほか、コンソーシアムの活動等についても記入すること。

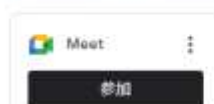
※遠隔授業システムを活用した教育課程外の取組については、アンダーラインを付すこと。

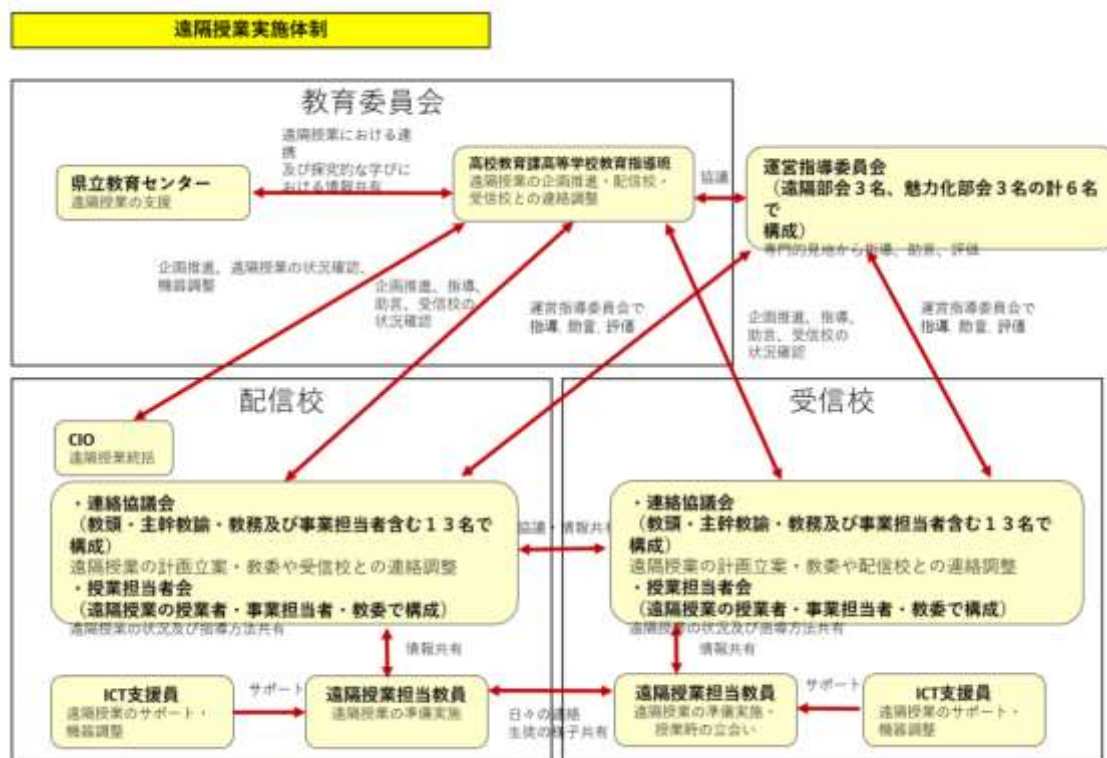
（2）調査研究実績の説明

①「教科・科目充実型」の遠隔授業などICTも活用した連携・協働の取組

（受信教室における体制の在り方に関する取組を含む。）

教育委員会と各授業担当者とのWEB会議や全構成校を対象とした授業担当者会、学校訪問による授業見学等で授業の実際を把握した。また、Classroomによる情報交換によって、授業づくりや生徒の見取り、評価方法について共有することができた。





■各構成校による「遠隔授業」に係る成果と課題

○第一高校

(成果)

- ・ビデオ会議システム (HDコム) やオンライン会議ツール (Google Meet)、その他 ICT を効果的な活用を常に行っていたことで、授業の配信をスムーズにできた。
- ・話し合いをしている様子や授業を聞いている相手校の反応などを見ることができるようになるため、試行錯誤を重ね、双方に満足いく遠隔授業の構成を見つけていくことができた。
- ・他校の先生と疑問や問題を話し合うことで解決へ向かうことができた。
- ・施設と設備等がきちんと整備され、配信のためのスタッフ等がいれば、ある高校の授業を他校に配信することが可能であるということがわかった。
- ・他校の生徒と (画面越しではあるが) 常に刺激を受けながら、緊張感を保って授業を進めることができた。(受信校の生徒にとっては、上級学校への進学を目指す、配信校の生徒向けの授業は、スピードが速く、定期考査の難易度も上がったと聞いている。)

(課題)

- ・受信校生徒が理解しているか、画面越しだとわかりにくい時がある。
- ・映せる範囲に限られる為、黒板全体を見ることが出来ないなど受信校生徒に不便が生じる場合がある。
- ・受信校生徒は、授業担当教師への質問が難しい。

- ・スライドの明るさやコントラストは外からの光や映し出される映像によって変化するので授業中もリモコン操作の細かい調節が必要。
- ・より良い授業構成を提示していくためにも、COREネットワーク構成校との情報共有をこまめに行っていく。
- ・トラブルが起こってしまうと、配信校へ迷惑がかかるため、起こりうるトラブルの予測と、解決方法の共有が必要。
- ・評価を行うことが大変困難である。目の前にいない生徒への評価を行うことの負担が大きく、受信校の生徒や保護者の理解が得られるかどうか。
- ・急な時間割変更や授業担当者の出張、体調不良の際に受信校に多大な迷惑をかけてしまう。または、そのような事案に関しての配信校からの配慮の負担が大きい。
- ・できるだけ、受信校の生徒にも配信校と同様の指導や発問を行いたいと考えたが、発問のレベルやタイミングを考えると、どうしても配信校優先となってしまった。
- ・3年生の演習の授業ということもあり、内容を協働学習に“深める”というところまではいけなかった。また、配信校の生徒と、受信校の生徒が互いに意見を交換し合うような活動には至らなかった。
- ・配信校の生徒にとっては、通常の授業と大きな変化がないと感じているのではないか。
- ・授業者としては、常にカメラがある状態のため、机間指導を行うことをためらった。
- ・互いの学校行事や、短縮授業の把握を常に気にしていること、そのための調整は大変であった。
- ・3年生の数学は、演習中心のため、協働的な学び、探究的な学びを互いに、ということであれば、1、2年次の教科書の内容を進める授業の方が適している。(授業の前半は演習、後半で解説、という形態では、ライブで通信している意味が半減してしまう。)

○小国高校

(成果)

- ・(HDコムの) 基本操作が単純で簡単。
- ・(HDコムの) カメラの画質が良く、板書がはっきりと見える
- ・生徒はモチベーション高く授業を受けている。
- ・生徒の個に応じた指導ができています。
- ・担当者は、他教員の授業を通年で見るができる。
- ・担任する生徒が授業を受ける様子を見ることができ、生徒理解につながる。

(課題)

- ・通信環境 (校内Wi-Fiが届かないため生徒用端末の動作が不安定。)
- ・受信校側生徒の発表等、こちらから発信する場合、授業のテンポが悪くなる。
- ・特別時間割等、時間割調整ができない授業への対応 (録画等)
- ・機器の操作やトラブル等が生じた場合の対応

(遠隔授業コーディネーターは受信校側には不在)

- ・展開授業数の増加に伴い、必要な人員が増加している。

○牛深高校

(成果)

- ・他校の生徒と一緒に授業を受けることが、生徒に良い刺激となった。
- ・大きな機材トラブルがなく、1年間遠隔授業を実施することができた。

(課題)

- ・時間割の調整が難しい。
- ・生徒のつまづきを把握しづらい。
- ・評価が難しい。

○球磨中央高校

(成果)

- ・球磨にいながら、小国高校の生徒をより身近に感じることができる。
- ・双方向の遠隔授業なので、配信側だけの授業にならないように、常に小国高校の生徒の様子を確認しながら授業を展開している。「せっかく同じ授業を受けているのだから」と、球磨中央高校と小国高校でコミュニケーションをとらせることができた。
- ・受信側生徒の感想①「授業内容はニーズにあったものか」
とてもそう思う 66.7% まあそう思う 33.3%
- ・受信側生徒の感想②
不安 33.3% 楽しみ 50% 上手くいくのかな? 16.7%
- ・受信側生徒の感想③
現在、遠隔授業を約8か月受けて、最初の思いと変化はありましたか?
あった 50% なかった 50%
- ・受信側生徒の感想④
授業が毎回楽しかった。
最初は不安だったが、今は意見を言い合ったり笑いもあるので楽しい。
他校の生徒との繋がりもできるし、意見も聴くことができる。
基本的に知らない話を聞くことができる。
より多くの人と意見交換ができ、考えを深めることができる。
伝えたいことを相手に直接話すことができ、思いが伝わる。
普通科では学べない商業の知識を得ることができる。
学校、学年が違う生徒と同じ授業を受け、交流ができる。
他校の奮起を知ることができ、端末の技術があがる。
これからの社会は端末を使う機会が多いので学ぶことが多くあった。

(課題)

- ・授業は楽しく学んでくれており、当初の不安は解消されてきたが、商業の基礎科目である「ビジネス基礎」を学習していない小国高校の生徒に専門科目である「マーケティング」をどう指導していくか。
- ・双方向遠隔授業においては「交流」「グループ活動」「コミュニケーション」がポイントになるのではないか。

②学校間連携を行うための運営体制に関する取組

ア 運営体制について

管理機関である教育委員会（高校教育課）とネットワーク構成校が一体となって研究開発が実施できるよう運営体制を下図のように構築した。



本事業の事務局機能を高校教育課内に置くとともに、高校教育課、県立教育センター、ネットワーク構成校の代表者が集まる「くまもと夢への架け橋ネットワーク連絡協議会」を運営体制の中心として位置づけた（具体的な内容については、イで述べる）。県立教育センターを除くネットワーク構成校（第一高校、小国高校、牛深高校、球磨中央高校）においては、コンソーシアムを設置し、高校と地域とが連携・協働し、地域を生かした探究的な学びを推進する体制を構築した（具体的な内容については、③アで述べる）。

CIOについては、本県では「遠隔授業コーディネーター」と称し、令和3年10月1日より任用を行い、第一高校に配置した。この遠隔授業コーディネーターについては、昨年度は遠隔会議システム等のハードウェアやネットワークに知見があるだけでなく、高校での教職経験がある金子将太郎氏を任用し、技術的な面からだけでなく、教育的な面からも遠隔授業のあり方について検討を行えるようにした。今年度は松田伊津子氏を起用し、遠隔授業での効果的な教育法の研究・開発や遠隔授業システムの構築・保守・管理を行った。松田氏には、くまもと夢への架け橋ネットワーク成果発表会において、遠隔授業で得た知見について発表していただいた。

事業運営に関し、専門的見地から指導、助言、評価を行う機関として運営指導委員会を設置した（具体的な内容については、ウで述べる）。

イ くまもと夢への架け橋ネットワーク連絡協議会について

連絡協議会にはネットワーク構成校の管理職及び事業担当者が参加し、遠隔授業及び地域と連携・協働した探究的な学びの実施に向けて、教育課程等の共通化や日課の調整等の体制づくり、年間を通じた成果と課題の共有を中心に協議を行った。

昨年度に引き続き、各学校の教育課程、日課、教科書、定期考査日程等は、各学校の実情や生徒や地域の実態に応じて決定しているため、構成校の4校を共通化することは難しい面もあるが、日課や教科書については、配信校に合わせる形で調整し、定期考査の日程については、配信側・受信側の2校間で共通日を設定し、そこで実施するようにした。

学習評価については、配信側・受信側の役割を明確化することで、受信側の生徒に対しても適切な評価が行えるようにした。

実施日（実施方法）	内 容
令和4年4月27日 （対面開催） ＊熊本県庁で開催。	事業の概要説明 教科書の選定について 教育課程の共通化について 各構成校による報告
令和4年7月8日 （オンライン開催） ＊教育委員会関係者が小国高校を訪問の上、開催。	Classroomの活用について CORE授業担当者会について 実証地域連絡会議について 運営指導委員会について アンケートについて 来年度の授業に係る教科書採択及び人数調査について 「くまモンプロジェクト」について 成果発表会について CORE進路講演会&地域課題解決講演会について 各構成校による報告
令和4年11月8日 （対面開催） ＊熊本県庁で開催。	「くまモンプロジェクト生徒中間発表会」の振り返り 来年度の授業に係る科目選択人数の現状について 来年度の授業に係る日課について 来年度のCORE事業に係る機器使用について 成果発表会について 予算について 成果報告書について CORE進路講演会について 各構成校による報告

令和4年11月9日 (オンライン開催)	遠隔授業(試行)のオンライン参観 遠隔授業の効果的な配信・受信について
[次年度開講授業打合せ] 令和5年1月18日 (オンライン開催) *教育委員会と球磨中央高校による打合せ。	GLS(グローバルスタディーズ)について
[次年度開講授業打合せ] 令和5年2月3日 (対面開催) *教育委員会と指導教諭による打合せ。	発展英語について
[次年度開講授業打合せ] 令和5年2月9日 (オンライン開催) *教育委員会と球磨中央高校・牛深高校による打合せ。	GLS(グローバルスタディーズ)について

ウ 運営指導委員会について

運営指導委員として以下の6名の学識経験者に委嘱を行った。昨年度は、遠隔授業や学習評価に知見のある大学教授等を中心に「遠隔部会」を、地域と学校のあり方に知見のある大学教授等を中心に「魅力化部会」を設置したが、今年度は部会を廃止し、全委員にテーマを問わずに指導・助言をいただいた。

【運営指導委員】

岐阜大学 益子 典文氏

熊本大学 田口 浩継氏

崇城大学 星合 隆成氏

島根大学 中村 怜詞氏

熊本大学 田中 尚人氏、

地域・教育魅力化プラットフォーム 奥田 麻依子氏

委員会は2回（令和4年10月と令和5年2月）開催し、遠隔授業や地域との連携・協働のあり方について指導・助言をいただいた。

【第1回】令和4年（2022年）10月3日実施（オンライン開催）

（内容）

- ・事業の概要説明
- ・事業説明〔概要〕（高校教育課）
- ・現状報告〔遠隔授業〕（各学校）
- ・運営指導委員からの指導・助言〔遠隔授業〕
- ・現状報告〔探究的な学び〕（各学校）
- ・運営指導委員からの指導・助言〔探究的な学び〕

（運営指導委員からの助言）

〔遠隔授業について〕

- ・各地域の事例を見ながら、事業を推進して欲しい。
- ・遠隔授業に対する研究と共に、対面授業の重要性も理解しておく必要がある。
- ・遠隔授業を行うことで、負担が減っているとはいえないのではないだろうか。体制が整い、認められるまでには時間がかかる。まずは、今年度やってみることから始める
とよいと思う。
- ・クラウドを探究で活用することも考えられる。遠隔における人間関係構築の動向も興味がある。
- ・時間割の調整については、同期するしかないと思われる。調整は宿命的なものだと考える。場合によっては、時間割の外でやるしかない。
- ・質問のしにくさという課題については、まず画面上でよいので発言することから始まる
と思う。教育上の工夫が必要である。
- ・複数の学校の生徒による授業には、新しいシナジーを感じる。マンネリ化を防ぐ効果
もあると思う。
- ・工夫できる余地があるかということも含めて、工夫の共有が必要だと思う。長所を生
かす取組が必要である。
- ・遠隔授業により負担が増えているように感じる。メリットが見出しにくい。空間が違
うもの同士のコミュニケーションには難しさがある。
- ・手元の端末を含めて、何ができるのか。調整の上、どこまでやらなければならないの
かという視点が大事である。
- ・事業を行う上で、最初はマストがかかる。制度的には動いていると思う。
- ・大学でも遠隔授業は行われている。いろいろな工夫を吸収して欲しい。

[コンソーシアム活用について]

- ・コンソーシアム活用のノウハウを共有しようとする動きは、熊本県独自のものである。
- ・評価が大事になるので、因果関係を整理すること。
- ・ルーブリック評価やICTのメリットを、学年を超えて考えていくことが必要。
- ・生徒同士の共同研究も実施できればよい。
- ・地域の方と学校がつながり、共同研究が模索できればよい。
- ・先行研究を学び、新しいテーマ設定を行うことも大事。

【第2回】令和5年（2023年）2月14日実施（オンライン開催）

(内容)

- ・事業成果報告(遠隔授業について、地域と連携・協働した探究的な学びについて)
- ・運営指導委員からの指導・助言

(運営指導委員からの助言)

[遠隔授業について]

- ・立ち合う者の資質を定義づけしていくことは大事。
- ・小規模校において、リソースを使っていくことは難しいかもしれない。
- ・遠隔授業を、対面授業の延長として捉えるのか、延長ではない授業として捉えるのか、では意味が違う。
- ・遠隔地にいる生徒はリアリティが異なるため、目の前にいる生徒とは傾斜をつけてリアリティを上げることを考えてもよい。
- ・共通に取り組む課題を持たせることで差がなくなることも考えられる。個人で取り組む時間を作ること。
- ・機器の設定に課題がある場合、高校生に設定させることも考えられるのではないかな。そのことが、相互作用を増やすことにもつながるかもしれない。
- ・グループの中に他校の生徒を入れて、小グループでの交流をする取組も考えられる。
- ・黒板の授業よりもスライドの方が見やすいと思う。
- ・時間割を年度が始まる前に調整することはできないだろうか。もともとのフレームがずれているものをそろえることは難しい。
- ・クラウドが入ることでお互いの頭の中にあるものを可視化できるようになった。Google スプレッドシートやフォームズでの回答によって、目に見える形で評価できるようにすることは有効である。
- ・声楽においては、防音ができるかどうか考慮した方がよい。音が反射する場合がある。
- ・先生方の負担はあると思う。教員の研修の仕組みとして、取り込むことはできないだろうか。スーパーティーチャーの授業を見学することで教員研修の一つにすること

も考えられる。

- 立ち合う者のコマ数が単純に増加してしまうのであれば、PTAの補助等も考えられないか。
- 事業の目的は、今後、参加校を増やして熊本県CORE事業を自走化させることにあると思う。
- 先行研究を参考にすることを第一回運営指導委員会で述べたが、質の高い研究のノウハウを学ぶ次のレベルへ来ている。
- 教員研修の一つとして位置づけ、教育センターとの連携を図ることも考えられるのではないだろうか。
- CORE事業については、我々にも発想の転換が求められているように思う。
- 自走化した場合、熊本県独自の運用方法を模索することも考えてよいと思う。

[コンソーシアム活用]

- 探究活動が素晴らしい。今後の発展として、他校とのコラボが進めばよい。
- ルーブリックを他校と一緒に作成する場合、それぞれの気風が異なるために、そろえる必要があるだろう。
- 個別対応ができる動きがあってもよいと思う。
- 県のサポートや地域のサポートが必要。
- 熊本県は大変前向きに取り組んでいる。
- 事業が展開中の課題なのか、事業にもともと存在する全体の課題なのか。
- 発表会に地域の方を招待して、その評価をフィードバックする取組は素晴らしい。
- 地域との連携を学年を超えて引き継ぐことも大事。学校の中での引き継ぎも大事。

③市町村、高等教育機関、産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、学校外の教育資源を活用した探究的な学びなどによる教育の高度化・多様化に関する取組

ア コンソーシアムについて

ネットワーク構成校では、地域との連携・協働した探究的な学びを実施するためにコンソーシアムを設置した（コンソーシアムを構成する機関は以下のとおり）。

第一高校、小国高校及び牛深高校のコンソーシアムについては、学校運営協議会を母体として構成し、球磨中央高校においては、学校運営協議会内の一部の団体で構成した。各校でのコンソーシアム会議は2～3回実施され、現在各校が行っている探究的な学びの説明及び地域の拠点としての高等学校のあり方についての協議を行った。

【第一高校：8人】

機関名	
第一高等学校清香会（同窓会）	熊本中央郵便局
熊本県立大学	第一高等学校好文会（PTA）

熊本市立西山中学校	熊本市都市建設局都市政策部市街地整備課
熊本市立一新小学校	第一高等学校

【小国高校：13人】

機関名	
小国町立小国中学校	小国町食生活改善推進協議会
小国町教育委員会	道の駅小国
小国高等学校後援会	小国町森林組合
小国町役場	小国警察署
南小国町役場	阿蘇広域行政事務組合消防本部北部分署
南小国町社会福祉協議会	小国高等学校育志会（PTA） ※2人

【牛深高校：12人】

機関名	
東海大学	天草市立牛深中学校
熊本日新聞牛深支局	天草市立牛深東中学校
天草市役所牛深支所	天草市立河浦中学校
牛深商工会議所	牛深高等学校育友会（PTA） *2人
深川水産株式会社	牛深高等学校
三和商船株式会社	

【球磨中央高校：4人】

機関名	
錦町役場	球磨中央高等学校*2人
人吉新聞社	

ネットワーク構成校においてコンソーシアム会議を開催したことによる各構成校の成果は次のとおりであった。

○第一高校

- ・地域における拠点としての高校の在り方や魅力化について協議を行った結果、地域資源を発掘し、地域人材育成の拠点となる学校づくりと多様な学びの教育実践につながった。
- ・熊本市市街地整備課との協働プロジェクトにより、生徒の汎用的能力の育成とかつ能動的な実践力の向上を図る取組となった。
- ・今年度、新たにD1L推進部を設置したことで、授業における探究活動の促進と「総合的な探究の時間」の研究・開発及びコンソーシアムとの連携を図る仕組みを整えた。

- ・熊本市市街地整備課との協働プロジェクトに取り組んだことにより、地域拠点としての学校づくりを推進する取組につながった。

○小国高校

- ・1年生が取り組む、総合的な探究の時間における地域をテーマとした課題研究において、例えば地元の道の駅駅長を務めるコンソーシアム委員に話を聞きに行き地域の観光等に関する考察を深めたり、コンソーシアム委員の紹介により様々な地域の方々に助言をいただいたりなど、地域の教育資源を活用した学びを実践できている。同時に、「地域とともにある学校」の実現と魅力化の推進、地域の活性化にもつながっている。
- ・生徒の探究活動に専門的な視点や具体性が加わり、より深まりのある研究に資している。また、委員の方々の学校の教育活動への関心が高まり、例えば公開授業の際には進んで授業をご覧になり、適切なお助言や温かい激励の言葉をいただくなど、「地域とともにある学校」づくりに寄与している。

○牛深高校

- ・地元自治体や関連企業、高等教育機関で構成されるコンソーシアムであるため、探究活動に関する講師の紹介や、探究活動成果物を地元の祭りや行事で販売したり、PRする機会をいただく等、多方面・多角的に御支援をいただくことができた。地元への若者定着やUターンについては、継続的な評価が必要である。
- ・第1回コンソーシアム時に本校探究活動テーマ一覧を配付した。その後、探究活動テーマに沿うような事業所を御紹介いただき、生徒達が直接事業所に出向き、研究を進めるための助言等をいただくことができた。第2回コンソーシアムでは、探究活動に関する予算について議論した。天草市事業からの予算捻出について検討していただくこととなった。

○球磨中央高校

- ・錦町チャレンジショップ、特産品を活用した商品開発の取り組みである。学校としては地域資源活用を目的とした探究的な学びの推進、地域としては持続可能な地域社会づくりに貢献できる人材の育成、教育委員会としては学校と地域が一体となった教育活動の推進という目的とつながっていると考える。
- ・生徒が地域資源の魅力、可能性に気付くことができたことが大きな成果である。また、地域と協働して活動を行う事で学校と地域との一体感が強くなったことも成果である。

イ くまモンプロジェクト（地域課題解決に向けた探究的な学び）について

各高校では、総合的な探究の時間等において探究的な学びを実践している。その取組を継続させながら、地域との連携・協働を踏まえた探究的な学びを実践するために、総合的な探究の時間等の目標（育成する資質・能力）等を見直し、指導と評価の計画を作成した。

各高校が地域課題解決のための探究的な学びを行う教科等は次のとおりである。

- ・第一高校（総合的な探究の時間）
- ・小国高校（総合的な探究の時間）
- ・牛深高校（産業社会と人間、総合的な探究の時間）
- ・球磨中央高校（総合的な探究の時間、GLS）

「くまモンプロジェクト」では、この計画をもとに行われる各構成校の探究的な学びについて、事前研究会や成果発表会を実施した。熊本県を一つのフィールドとしてとらえ、各高校の取組を一体的なものにするための仕組みを、クラウドを活用して構築に取り組んだ。

地域課題解決に向けた探究的な学び（くまモンプロジェクト）について

目的	年間スケジュール(例)
多様な地域(熊本市・阿蘇・天草・人吉球磨)が一体となって地域課題解決に向けた探究活動(共同調査、意見交換、合同発表会等)を行うことにより、地域への貢献及び生徒の「生きる力」の育成に寄与する。	○1学期 ◆「もっとも一つとくまもつ」連続講座 地域の概要・熊本の農林水産業・企業立地・阿蘇の魅力 等の幅広いテーマについて、自治体職員や企業人材に講演をしていただく。 ◆研究テーマの設定、グループ分け ○夏季休業 ◆各班による調査 ○2学期 ◆グループによる調査 ◆中間発表 ○3学期 ◆成果発表 ◆1年間のまとめ
○令和4年度より開始 ○各構成校に学校間連携担当者を置く ○担当者会議を定期的にオンラインで開催 ○令和5年度には、県外の学校との学校間連携を行うことを目指す。	

「目的」の整理

①地域への貢献

→探究的な学びの成果が、目に見える形として、地域への貢献に活かされること。

②生徒の「生きる力」の育成

→探究的な学びの活動を通して、生徒自身が自己の在り方生き方を考えながら、課題を発見し解決して行くための資質・能力につなげること。

「手法」の整理

①熊本県下の4つの地域(熊本(第一高校)、阿蘇(小国高校)、天草(牛深高校)、人吉球磨(球磨中央高校))の生徒が、学校や地域の枠を超えて一体となる。

→生徒が学校や地域の枠を超えて一体となる手法が必要。

②地域課題解決に向けた探究的な学びを展開する。

→各地域の組織・団体とのつながりが必要。

手法①（案）

- ・ 探究的な手法・過程・成果の共有。→クラウド活用
- ・ 遠隔でグループ構築し、共同研究。
- ・ 成果レポートの共同作成。
- ・ 指導と評価の計画の一部共有化。

手法②（案）

・ コンソーシアムとの連携

→自分が住む地域課題解決の研究のために、
他地域のコンソーシアム活用。

（探究的な学びの成果をコンソーシアム内で発表等）

5. 遠隔授業の実施状況 *「授業回数」は、遠隔授業を想定した授業の回数を示す。）

受信校	教科	科目	遠隔授業を実施した授業回数（対面授業を除く。）
小国高校	数学	数学B	33
小国高校	数学	実践文系数学	51
小国高校	商業	マーケティング	44
牛深高校	地理	地理A	61
球磨中央高校	英語	異文化理解	24

6. 調査研究の進捗状況、成果、評価（※目標設定シート（別紙様式1 別添4）を添付）

○COREネットワークの構成校における遠隔授業の実施科目数について

昨年度は遠隔授業を本格実施していなかったため0であったが、今年度から本格実施し、目標値の5科目で実施した。

○地域課題の解決等の探究的な学びに関する科目等の数

球磨中央高校では、総合的な探究の時間（球磨地域学）及びグローバルスタディーズ（公民科学校設定科目）において地域と連携・協働した授業を実施している。

○CIOによる成果発表会に参加した高校の数、CIOによる遠隔授業研修会を受講した高校の数

12月に成果発表会を実施し、教育委員会や各構成校による発表と共に、CIOによる発表を実施した。県内の高等学校を想定していたが、全国のCOREハイスクール・ネットワーク構想に係る関係高等学校や管理機関に対しても発表を実施した。

○地元自治体等の関係機関とコンソーシアムを構築している学校数、県立高校のコンソーシアムの設置校数

各高校にコンソーシアムを設置し、各構成校の探究的な学びについて協議することがで

きた。また、その協議内容を各構成校で共有し、「くまモンプロジェクト」等で学校間を超えた探究的な学びに結び付けた。今後、「コンソーシアム委員会の1校当たりの年間開催回数」の目標達成に向けて、学校とコンソーシアムとの連携・協働のあり方について、引き続き協議を進めていく。

7. 次年度以降の課題及び改善点

令和4年度は、昨年度の準備をもとに、遠隔授業の本格実施、教育課程等の共通化や遠隔授業のあり方の研究、クラウドを活用したコンソーシアムの活用や地域課題解決に向けた探究的な学びを中心に取り組んだ。

管理機関として、くまもと夢への架け橋ネットワーク連絡協議会や運営指導委員会、及び今年度より実施したくまモンプロジェクト連絡協議会や遠隔授業の授業担当者を対象とした授業担当者連絡協議会等の組織の充実を図るとともに、事業の進捗状況を把握するために、引き続き、対面又はオンラインによるネットワーク構成校の訪問を実施し、管理機関としてネットワーク構成校に対して指導・助言を行っていく。また、今年度作成した Classroom については、各構成校の事業担当者との連絡や各構成校の生徒同士のコミュニケーションに有効であったため、来年度も活用を拡大したい。

遠隔授業においては、声楽やGLS、指導教諭による発展英語を新規で開講する。今年度の遠隔授業に係る成果と課題を踏まえ、効果的な授業配信方法について研究調査を重ねていく。また、学習評価についても、引き続き、適切な評価が行えるよう評価方法を確立していく。

地域課題解決に向けた探究的な学びにおいては、学校とコンソーシアムの一体的な活動をとおして探究的な学びの充実を図るとともに、今年度のくまモンプロジェクトの成果を踏まえ、引き続き、クラウドも活用しながら、生徒の資質・能力の育成、学校及び地域の活性化につなげていくモデルケースを構築していく。熊本県の全県立高校の高校生が探究活動を発表する「熊本スーパーハイスクール(KSH)生徒研究発表会」において、CORE構成校をグループ化したについても検討したい。

高校教育課による事業成果報告会等については来年度も12月に実施を予定し、本事業の成果を本県及びCOREハイスクール・ネットワーク構想に係る全国の関係高等学校及び管理機関へも広めていく。

別紙様式 1 別添 4

COREハイスクール・ネットワーク構想事業 目標設定シート

管理機関	熊本県教育委員会
------	----------

1. 本構想において、実現する成果目標の設定（アウトカム）

(1) 学びの基礎診断等により把握する生徒の学力の定着・向上の状況

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		57%	61%	65%
実績値	52.9%	55.1%		
把握のための測定方法及び指標	第3期熊本県教育振興基本計画の数値目標に基づき、学力が向上した生徒の割合（単位：%）で算出した（「学びの基礎診断」認定ツールの結果に基づき算出）。今後も継続的に活用し、学びのPDCAサイクルの確立と学力向上に向けた取組を支援する。			

(2) 地域課題の解決等の探究的な学びに関する科目等の数（総合的な探究の時間を含む。）

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		0	5	7
実績値	0	2		

（参考）上記のうち、学校設定科目の数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		0	1	2
実績値	0	1		

(3) 免許外教科担任制度の活用件数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		0	0	0
実績値	0	0		
構成校の数				

(4) その他、管理機関が設定した成果目標

成果目標①：県立高校のコンソーシアムの設置校数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		7	10	20
実績値	4	8		
目標設定の考え方	地方部の高校を中心にコンソーシアムの設置を進め、地域と協働した体制づくりを推進する。			

成果目標②：CIOによる成果発表会に参加した高校の数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
目標値		20	50	50
実績値	0	0		
目標設定の考え方	各県立高校が成果発表会に参加することにより、遠隔授業への理解を深め、普及を図る。			

2. COREハイスクール・ネットワークとしての活動指標（アウトプット）

(1) COREネットワークの構成校における遠隔授業の実施科目数

	2年度	3年度	4年度	5年度
実績	0	0		
見込み		0	5	16

(2) 地元自治体等の関係機関とコンソーシアムを構築している学校数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	0	4		
見込み		4	4	4

(3) その他、管理機関が設定した活動指標

活動指標①：コンソーシアム委員会の1校当たりの年間開催回数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	0	2		
見込み		4	5	5
活動指標 の考え方	概ね2ヶ月に1回の開催を目指す。			

活動指標②：CIOによる遠隔授業研修会を受講した高校の数

	2年度（実績）	3年度	4年度	5年度
実績	0	0		
見込み		50	50	50
活動指標 の考え方	各県立高校が研修会に参加することにより、遠隔授業への理解を深め、普及を図る。			